

今年もご出席いただきましたご来賓の方々に広報委員が取材をいたしました。
テーマは「私のお勧めする本」で、飯泉嘉門徳島県知事をはじめ顧問の国会議員・県議会議員の先生方に本のタイトルとその理由についてお聞きしてみました。
 ご紹介して頂いた本を一度読んでみてはいかがでしょうか。

飯泉嘉門 徳島県知事

タイトル 三国誌演義 (岩波書店)
理由 これからの 30 年を決める重要な今年、群雄割拠の大混乱の時代に将来に夢を馳せ、自らの努力で実現しようとした英雄達の熱き想いが勇気とヒントを与えてくれます。
タイトル 孤愁 (サウダーデ)
理由 父・新田二郎氏のモラエスをテーマとした作品を親子二代で書き上げられた「国家の品格」と並ぶ秀作!
 全国初、二度目の国民文化祭を実施した徳島県の阿波文化の奥深さを全国に PR してくれます。

中谷智司 参議院議員

タイトル 竜馬がゆく
理由 志と情熱で激動の日本の大転換をなしとげた志士たちの姿に感動した。



中西祐介 参議院議員

タイトル 天空の舟
理由 中国古代史から東洋文化を学び知る事が出来る。
タイトル 霸王の家
理由 徳川家のルーツから日本に根付く社会世相を学ぶ。
タイトル 項羽と劉邦
理由 人心をつかむ指導者のあり方を史実より分かりやすい対比で示している。



櫻本 孝 徳島県議会議員

タイトル 巨匠 フランク・ロイド・ライト (ブルース・ブルックス・ファイアー著 デヴィッド・ラーキン ブルース・ブルックス・ファイアー編 大木順子訳/鹿島出版会)
理由 私は近代建築三大巨匠の一人「フランク・ロイド・ライト」の作品が好きで、そのきっかけとなったのが愛知県犬山市の博物館明治村にあるライトが手がけた帝国ホテル旧本館(ライト館)でした。
 特に私が強く惹かれたのは、ライトの特徴でもある幾何学的でシンプルなデザインであり、飽きのこない普遍的ともいべきその美しさは、ライトの「有機的建築」(時間、場所、そして人間に適切な建築)という思想が醸し出している「美」ではないかと思えます。
 本書はライトの数々の素晴らしい作品を年代順に紹介しており、時間を忘れてずっと眺めたいと思わせるようなライトの魅力満載の一冊です。
タイトル 帝国ホテル・ライト館の謎 天才建築家と日本人たち (山口由美著/集英社新書)
理由 20 世紀初頭の日本の迎賓館たる帝国ホテルを舞台に、二代目の新館(ライト館)建設を巡って、私の好きな近代建築三大巨匠の一人「フランク・ロイド・ライト」や、ライトを設計者として指名した帝国ホテルの支配人・林愛作などが織りなす様々な人間模様や、関東大震災を乗り越えたという「耐震神話」が語り継がれる「ライト館」について、大祖父が帝国ホテルの支配人・山口正造という著者が、取材等に基づき独自の視点から考察した数々のエピソードが非常に興味深い一冊です。
タイトル シェールガス革命で世界は激変する 石油からガスへ (長谷川慶太郎・泉谷渉著/東洋経済新報社)
理由 我が国はエネルギー資源に乏しく、そのほとんどを海外からの輸入に頼っており、エネルギー供給構造は極めて脆弱であります。東京電力福島第1原発事故により、このことが改めて浮き彫りとなり、我が国のエネルギー政策は抜本的な見直しを迫られております。こうした中、アメリカでは現在、シェールガス・フィーバーが沸き起こっており、そのインパクトは「世紀のエネルギー革命」ともいわれているほど大きなものであります。本書は、アメリカ発のシェールガス革命が具体的にどのような変革をもたらすのかを様々な観点から展望しており、エネルギーの安定供給の確保に莫大なコストをかけている日本国民としては一読する価値が大いにある一冊です。

丸若祐二 徳島県議会議員

タイトル 海賊とよばれた男 (百田尚樹著)
理由 出光佐三氏をモデルとする岡岡鐵造という男の一生は、満ち足りた今の時代からみると、こんな人物が本当に実在したのかと驚くとともに、心の底から感動と勇気がわき上がる思いがします。
 日本男児必読の書と言えるでしょう!
タイトル 売国奴に告ぐ (三橋貴明・中野剛志著)
理由 著者の二人は主張が明快でプレがなく、経済活動に普遍的な基準があるわけではなく、国家の経済政策は現実との関連で「自由主義」にも「保護主義」にもなり得るものであるという至極あたりまえのことを再確認させてくれます。日本が採るべきマクロ経済政策の基本がスツと解る本と言えます。
タイトル 七つの会議 (池井戸潤著)
理由 本作の登場人物は、ヒーローなのか悪役なのか。企業の一部が隠蔽するある秘密に、登場人物がどう立ち向かっていくかが描かれる中で、人間にはそれぞれ過去があり現在を生きているということ、人として生きるために、正さなくてはならないものとは、また本当の罪とは何なのかを問いかけてます。
 人であるためには、何を「糧」として生きていくかを改めて考えさせられる一冊と言えます。